



古典と
今風



川崎ゆきお

武田は懸命にやった仕事なのに評価されず、腐っていた。かなり肩入れし、熱心にやった仕事なのだが、それは武田自身の問題で、その熱量がそのまま評価されるわけではない。

時代が、そのやり方とそぐわなくなったのかもしれない。以前は価値があり、誰もが一目置く仕事なのだが、需要がなくなったのだ。

「武田君がやっているのは、もはや古典なんだなあ。古典は常用しないだろ。たまに見るかもしれないが、もっと今風なものの方を多く見るはずだ」と、友人の河野が語る。

「今風か」

「そうだよ」

「しかし、今風では本格派の醍醐味がないじゃないか」

「その本格派がしんどくなったんだろうよ。だから、喰う奴が減った」

「でも、まだまだいるだろ」

「いるけど、右肩下がりで。そちらにはもう未来はない。将来はない」

「でも、需要はあるんだろ」

「ああ、あるにはある。それなりに残るだろうけど、逆に君程度の力では生き残れないよ」

「ああ」

「その道のトップクラスでないとね」

「一杯上がっているなあ」

「そうだろ。居残れるのはトップクラスだけ、だから武田君も鞍替えすることだね。実力はなくても、需要が多い仕事なら、そこそこやっていけるから」

「ああ、考えてみるけど、この前やった仕事、自分でもよくやったと思うんだけどなあ」

「それは、君がそう思っているだけで、大した仕事じゃなかったんだよ」

武田は言われてみれば、その通りで、一言も返せない。やはり今風な仕事へ移行すべきなのかもしれない。と思うものの、それでは好きでやっていた仕事が、それほど好きではなくなる。今風に変えると、もう醍醐味がないのだ。

「どうだい、決心したかい」

「そのつもりだけど」

「そうかい、じゃ、紹介してやるよ」

武田は河野から名刺をもらった。河野も鞍替えし、今風の仕事をやりだしていたのだ。その名刺の裏に簡単な紹介文がついていた。この人、よろしく、程度の。

武田は名刺の住所まで行き、それらしい雑居ビルを見つけたが、その前に人の群が目に入った。焚き火をしている。

武田は、その中の一人に名刺に書かれている会社名を言った。

「ああ、ここだよ」

「この人出は？」

「待ってるのさ、仕事が入るまでね」

「入るって」

「仕事が発生すれば、社の人而降りて来るから」

「あ、そうですか」

「尻尾は、もっと右だよ。この玄関を回り込んだ、向こうの路地だよ」

武田はその露地に入った。一列に並んでいる。

徹夜でチケットでも買いに来た風景に近い。

「今風で、需要の多い仕事だけど、これではなあ」

武田は並ぶことを早々に諦めた。

そして、今風ではなく、もう古典になり、今では大家しか飯が食えない仕事に戻ることにした

。

これは、怠けているだけなんだなあ、と呟きながら。

了